

過保護な警視の溺愛ターゲット

プロローグ

あれは、私——睦永初海むつなはつみがまだ六歳の、ピカピカの一年生のときだった。

「お嬢ちゃん、可愛いねえ」

大きなランドセルを背負い、ひとりで下校していた私は背後から声を掛けられた。

振り返った先にいたのは、見ず知らずのおじさんだ。

最初に断っておくが、私は決して美少女ではない。容姿ならば、お隣に住んでいる成瀬三佳なるせみかちゃんのほうがよっぽど華やかで女の子らしい。私は普通の、地味で目立たない女の子だ。

この日も三佳ちゃんと一緒だったら、私が声を掛けられることはなかったと思う。いつもは三佳ちゃんと、その双子の兄である亮ちゃんりやうの三人で登下校しているのだけれど、たまたまタイミンが合わずにひとりで下校していた。

そんな私に可愛いと言ったおじさんは、全身黒ずくめにマスク姿という、いかにも怪しい格好をしている。顔は見えなくとも口角は上がっている気がするし、興奮しているのか鼻息も荒い。

「ランドセルが重そうだね。おじさんが、車で家に連れて行ってあげるよ」

目を細めたおじさんは恐らく笑いながら、ゆつくりと私に近づいてくる。

たしかに、教科書やノートが詰まったランドセルはちと重い。だからといってヒョイヒョイ車に乗るほど、私も馬鹿じゃない。

『イカのおすし』——いかない、のらない、おおきなこえをだす、すぐにげる、しらせる、は、学校で教えてもらった大事な「おやくそく」だ。

危険を感じた私は、おじさんを無視して家に向かって走り出す。

——だって、どう考えたって変な人だもん！

だが、小学生の足ではあつという間に追いつかれ、思いきり腕を掴まれてしまった。

「痛い目に遭いたくなかったら大人しくしてろ」

耳元で囁かれた低い声に、幼い私は怯んで固まってしまった。

おじさんの手を振りほどきたくとも、子供の力ではどうにもならない。ジリジリと身体が引きずられ、離れた場所に停めてあった、おじさんのものと思われる車のほうに連れていかれる。

——このままだと……

「や、やだ……」

運悪く周囲に人通りはなく、本当に恐怖したときには咄嗟に大声が出るものでもない。

やっとの思いで絞り出した声はか細くて、とても誰かに届くほどではなかった。

「だけど——」

「おい、おっさん。その手を離せ」

突然聞こえた第三者の声に、涙で滲んだ視線を向ける。

黒ずくめのおじさんと車との間に、同じく黒ずくめの誰かが立っていたのだが——

逆光で、顔が見えない……

何度か目を瞬かせていると、ぼんやりとしていたシルエットが徐々にはつきりしていく。

「総ちゃん……？」

中学校の制服である学ランに身を包んだ、お隣のお兄ちゃんがそこにいた。

成瀬総一郎——総ちゃんは、三佳ちゃんや亮ちゃんの八歳年上のお兄ちゃんだ。お隣さんだし、

幼なじみの兄なので顔を合わせることはあるが、実はそれほど親しくない。

見栄えのいい成瀬きょうだいの中でも、長男の総ちゃんは群を抜いている。六歳の私にとって、

総ちゃんは年の差以上に立派な大人だった。さらに彼は、気軽に声を掛けられるほど愛想がよくないため、せいぜい挨拶する程度の仲でしかない。

それでも、この危機的状况での見知った人物の登場に、ホッとした私から力が抜ける。

「その子をどうするつもりだ？」

総ちゃんが眼光を鋭くした瞬間、おじさんの喉からヒイツと奇つ怪な音が漏れた。

総ちゃんは中学生ながら、おじさんよりも背が高かった。おまけに、体つきもガッチリとしていて、おじさんを相手に喧嘩をしても負けそうな気配がない。

あとで知ったことだが、総ちゃんは子供の頃から武道の心得があった。日々肉体を鍛錬している少年と、小学生をコソコソ連れ去ろうとする中年オヤジとでは、力の差は歴然としていたのだろう。「くそつたれ！」

自分が不利だと本能的に察したおじさんは、掴んでいた私を総ちゃん目がけて投げつけた。「——っ！」

ブンツと周囲の景色がすごい速さで移動して、またもや声が出なかった。

スローモーションになる視界に映ったのは、大きく広げられた両手と、制服の金ボタン。

次の瞬間——全身を包み込んだあたたかさを、私は今でも覚えている。

かなりの勢いでぶつかっただけはさすが、不思議と痛みはなかった。私を受け止めた総ちゃんの身体はうしろへ傾き、尻もちをつく。

一方のおじさんは、一目散に車まで戻ってその場から逃げようとしていた。

「待て……！」

総ちゃんは、あとを追うためにすぐさま立ち上がりとしたのだけれど、それを制したのは他にあらぬ私だった。

「総、ちゃ……」

総ちゃんが離れてしまうことに漠然とした不安を感じて、必死にしがみついた。

「こ、こわかった、よう……」

このときになってようやく、頭の中にお父さんとお母さんの顔が浮かんだ。もしも連れていかれたら、両親にも友達にも、二度と会えなかったかもしれない。

すぐそばにある総ちゃんのぬくもりだけが、自分が無事だと証明する唯一のものだった。

ぼろぼろと涙を零しながら震えていると、ふたたび力強い腕に抱き締められる。直後、私たちのすぐ脇を、急発進した車が走り去った。

「——もう、大丈夫だ」

車の音が遠くなった頃、総ちゃんの大きな手が私の頭を優しく撫でる。

ゆっくりと顔を上げると、優しい笑顔の総ちゃんが、すぐ近くから私を見下ろしていた。

悪の手から自分を救ってくれた、正義の味方——私には、そう見えた。

「怖かったね。怪我は、していない？」

おじさんに凄んでいたときと違う穏やかな声に、かあつと全身が熱くなる。

「今日は、亮次郎と三佳は一緒じゃないの？」

問いかげに、無言で首を縦に振る。さっきまでの恐怖ではなく、別の緊張から言葉が出ない。

弟たちの不在を知った総ちゃんの眉間には皺が寄る。

「そうか……なら、念のために二人も迎えに行くか——」

「イヤッ！」

総ちゃんの言葉を食い気味に遮った。

「大丈夫だよ、先に家まで送るから」

「イヤだ！ 総ちゃんと、一緒がいい！」

ぎゅうっと、総ちゃんの身体に抱きつく手に力を込める。

置いていかれるという不安もあった。でもそれ以上に、総ちゃんが弟と妹を心配しているのが、嫌だった。

私はひとりっ子で、総ちゃんのように自分を守ってくれる兄はいない。三佳ちゃんと亮ちゃんは大好きだけれど、それだけは妬ましかつたのかもしれない。

総ちゃんには、近寄りがたいという印象もある反面、惹かれていた。

三佳ちゃんの家遊びに行ったとき、総ちゃんがいるといつも緊張する。たった一言挨拶するだけなのに胸がドキドキして、素っ気なくとも返事をしてけるとホッとした。

私には無愛想な総ちゃんだけれど、弟や妹と接するときには空気が変わる。赤の他人と家族では態度が違って当たり前なのに、自分だけが仲間外れにされている気がして嫌だった。

「あのね、亮次郎と三佳は、俺の大事な弟と妹なんだよ？」

「三佳ちゃんと亮ちゃんはいつも一緒だから、大丈夫だもん！」

わざわざ行かなくても、双子はいつもセットで行動している。だったら総ちゃんは、私のそばにいてくれてもバチは当たらないだろう。

大人になった今ならば、総ちゃんが自分の弟妹を案じる気持ちがかかる。だけど、このときの私

は本当に子供だったから、そんなことを考える余裕もなかった。

三佳ちゃんや亮ちゃんのように、私も仲間に入れてほしい。

それだけじゃなくて――

「総ちゃんは正義のヒーローだよ。お願い、総ちゃん。私を守って」

恐怖体験をした直後だったからだろう。

ヒーローを、本気で、自分だけのものにしたかった。

「もちろん守ってあげるけど、あいつらのことも心配なんだよ」

それでもなお困った顔をする総ちゃんに、余計に腹が立つ。

「だったら私も、総ちゃんの妹になる！」

精一杯背伸びをして、総ちゃんの綺麗な顔にこれでもかと近づいて、私は必死にお願いした。

「私だって、総ちゃんとずっと一緒がいい。三佳ちゃんには亮ちゃんがいるのに、私には誰もいないから、総ちゃんだけは私のそばにいてほしいの」

大きく見開かれた総ちゃんの瞳に自分の顔が映る。

勢いに押されたのか、総ちゃんの目線が宙を彷徨うのがわかった。心なしか、顔が赤くなっていたような気もする。

「別に妹にならなくても、守ってもらう方法は他にも……」

「じゃあ教えて！ 私、なんでもするから！」

ぼそぼそとした呟きにも即座に反応するくらい、私は真剣だった。そんな必死さが、通じたのかもしれない。

しばらく黙り込んでいた総ちゃんだけれど、やがて、意を決したように口を開く。

「それなら——」

続いた言葉に、私は迷いなく首を縦に振った。

それが、今日まで続く、長い長い束縛生活の始まりとも知らず——

第一話 その男、過保護につき

あれから、十五年の歳月が流れた。

——困ったことになったな……

短大卒業後に就職をした私は現在、社会人一年目の二十一歳。仕事帰りに同僚と食事に行くのもよくあることで、今日も先輩に誘われて近くの居酒屋へとやって来た。

成人しているのだから、お酒を飲むことに問題はない。困っているのはこのシチュエーションだ。私たちの向かいには、知らない男の人が座っている。それも、横並びにずらりと七人。

「ちよっと、三佳ちゃん。これって、合コンじゃない？」

ヒソヒソと右隣に座る同僚の成瀬三佳に声を掛ける。三佳ちゃんは、家が隣同士で幼なじみの、あの三佳ちゃんだ。

長い年月を過ごしても私たちの友情は変わらない。小中高、短大と同じ学校に通い、選んだ就職先も同じ——まあ、そこには友情以外の、ちよっとした思惑もあるのだけれど。

とにかく私たちは、「姉妹」のように育った仲である。それこそ、置かれている境遇も同じ。だから、もちろん三佳ちゃんもこの状況に驚いていると思いきや、意外にも彼女に動揺している素振りはない。

「そうね。これで合コン以外だったら、逆にビックリよね」

彼女の返答を聞いて、改めて違和感に気づいた。三佳ちゃんの服装が、今朝出社したときと変わっている。通勤時に比べて明らかにアクセサリが多い。お化粧だって、仕事終わりなのにテカリもなくバツチリだ。

「三佳ちゃん、もしかして知ってた……?」

「当たり前よ。今日の発起人は七緒さんだから」

澄ました笑顔の三佳ちゃんは、自分の右隣へと視線を移す。そこには、最近婚活に力を入れている先輩が座っている。

「七緒さんの招集なら合コンよね。まあ、初海ちゃんには意図的に隠してたけど」

「……なんで？」

「そりゃあ、今みたいに緊張するからに決まってるじゃない」

三佳ちゃんの視線が、膝の上でガチガチに固まっている私の手へと移される。

たしかに合コンは得意ではない。小中学校は共学でも高校以降は女子校育ちで、飲み会に参加するようになったのもつい最近なのだから、こういうシチュエーションに慣れていないのは当然だろう。

——だけど、緊張しているのはそんな理由ではない。

「このことは、許可、取ってる？」

私がなにに不安を感じているのか、わからない三佳ちゃんではないはずだ。

私たちが合コンに参加していることを、「あの人」が知っているかどうか——

「許可なんて取るわけじゃないじゃない。情報が漏れないように、今日まで黙ってたのよ」

悪びれた様子もなく、三佳ちゃんはジョッキに口を付けた。

「確信犯かい！」

思わず声が大きくなったけど、掴みかからなかっただけでも褒めてもらいたい。

「ヤバイよ。この状況は、非常にヤバイよ!」

「——あのね、初海ちゃん」

喉を潤した三佳ちゃんは、静かにジョッキをテーブルに戻す。

「飲み会に参加するのに、いつまでも保護者の許可が必要なのがおかしいの。私たちはもう、

社会人なのよ?」

ふう、と一息吐いて、三佳ちゃんはその大きな瞳で前を見据える。

正面の男性を睨んでいるのではない。彼女が見ているのは、ここにはいない相手だ。

「今までどれだけ私たちが抑圧されてきたと思ってる? 碌な恋愛経験もなく、人の話ばかりを

聞かされて。彼氏ができたとか、親に内緒で旅行に行ったとか、初エッチは彼の部屋とか……他人

の恋バナは、いい加減うんざりなのよ!」

——あ、これはマズイ。

ジョッキを握る手が小刻みに震えている。これは、話している間に、怒りに火が点いてしまったパターンだ。

「私だって、彼氏のひとりや二人ほしいの! あの男が不在の今こそが、私たちに与えられた最高のチャンスなのよ!」

周囲を窺ったところ——熱弁を振るっていた三佳ちゃんは、多くの男性の注目を集めていた。

どれだけ合コンに気合いを入れているんだと、はつきり言ってドン引きだ。

「やだ、私ったら気合い入りすぎ! 恥ずかしい」

さつきまでとは打って変わった、鈴を転がすような愛らしい声と笑顔。思いきり顔を赤くして慌てる様、周囲からは自然と笑いが起こる。

ただのぶりっ子なら反感を買うが、三佳ちゃんは見事にドジっ子を演じてみせた。

三佳ちゃんの可愛さは、相変わらず健在だ。わざわざ合コンに参加しなくとも、彼女と付き合いたい男の人は大勢いるだろう。

それなのになぜ、彼女の恋愛経験が乏しいかといえば、彼女の家族——とりわけ兄弟が、過保護だから。

末っ子で唯一の女の子が目立つほど可愛いものだから、心配になるのも無理はない。毎日の登下校は双子の兄の同伴が当たり前。部活もバイトも、もちろん禁止。交友関係も厳しくチェックされて、友達の家泊まりに行くにも兄たちの許可が必要だった。

女子校に通ったのも、彼らの強いすすめがあったからだ。成長につれて監視の目が行き届かなくなるのを危惧していたに違いない。

子供の頃に総ちゃんに対して『妹になりたい』と駄々をこねたせいで、私も同等の扱いを受けてきたのだが、大人になった今では自分にそんな価値がないことも理解している。

だって、三佳ちゃんに比べれば、私はいたって普通なのだ。

取り立てて不細工ではない、と思う。少々垂れ気味でも、ぼつちりとした目は自分でも気に入っている。童顔で背も低いけど、胸の大きさだけは三佳ちゃんに勝っているから、一部のマニアには受けがいいだろう。

今も、三佳ちゃんには男性陣からお声がかかっている。これだけ可愛い子が『彼氏がほしい』と

公言しているのだから、男性陣は、俄然やる気になるだろう。

勘違いしてほしくないのが、私は三佳ちゃんにコンプレックスがあるわけじゃない。

三佳ちゃんは、私の自慢の親友だ。だから、恋人がほしいと望むなら、このチャンスにその願いを叶えてほしい。

就職をして、実家を離れて、仕事帰りの飲み会にも参加できる。同僚たちとも気兼ねなく外出して——いちいち詮索されないこの自由を、ずっと手にしていきたい！

祝・解放！ ビバ・自由！

だからこそ、無断で合コンに参加したなんて、「あの人」には絶対に知られてはならない。

——まあ、そう簡単にバシることはないと思うけど……

それでも、一抹の不安が拭いきれないのはなぜだろう？

「難しい顔しているけど、なにか考え事？」

ふと気がつくとき、私の前にはさつきとは違う男の人が座っていた。

垂れ目の私は普段から困った顔に見られる。考え事をしているときは特に顕著で、三佳ちゃんからよく注意をされる。

「もしかして疲れてる？ そうだよねえ、お仕事お疲れさま」

彼は置いたままの私のジョッキを持つように促し、自分のグラスを軽くぶつけた。

「明日は休みなんだし、嫌なことはパーツと飲んで忘れないと！」

「え、ええ……そうすね」

目の前の彼はすでにアルコールが回っているようで、テンションが高すぎて正直ついていけない。

——それに、なんでわざわざ私に話しかけるんだろう？

私の横には三佳ちゃんがいるのに、と横目で確認して納得した。彼女の前にはすでに人が集まっている。

「俺、君みたいな大人しい子のほうがタイプなんだよね」

さしずめ、人氣が集中している三佳ちゃんを早々に諦めて、あふれた私に流れてきたというところか。

三佳ちゃんとの対比で大人しそうだと言われがちな私だけど、実際はいつも無口でキョドっているわけではない。合コンよりも気になることがあるから黙っていただけで、心の中ではあれこれと突っ込んでいるわけだし、男の人と話すのが苦手なんてこともない。

「さっきから全然飲んでないけど、もしかしてビールは苦手？ だったらこっちを飲んでみなよ」
そう言っただけは、持っていたグラスを私にすすめてきた。

「カクテルなんだけど、口当たりがいいから飲みやすいよ。せつかくだから、親睦を深めようよ」
居酒屋の大きめのグラスに並々と注がれたオレンジ色の飲み物は、見た目は普通のジュースに見える。

人当たりの良さそうな彼の笑顔に、胡散臭さは感じない。それに、合コンだからといって、彼氏探しを目的にしなくてもいい。新たな交友関係を開拓するために楽しんでもいいはずだ。

「そうですね、じゃあ——」

改めて、乾杯しようとしたときだった。

「——飲むな」

低く響いた声と共に、通路と座敷を隔てていた襖がスパンと開く。
聞き覚えのあるその声に、私の身体がピシリと固まった。

開いた襖は私の左側にあるのだが、怖くてそちらを見ることができない。わざわざ見なくとも、流れてくる冷気のようなものが顔の半分をひしひしと伝わってくる。

だから仕方なく、反対側の三佳ちゃんのほうを向いた。そこで、さっきまで楽しそうに談笑していた彼女の顔が青くなっているのを見て、確信した。

——そこには、絶対に会いたくなかった人物が、いる。

しばしの静寂のあと、三佳ちゃんの絶叫が響く。

「ぎゃあああっ！ お、おに……な、なんで!？」

——鬼ではない、お兄ちゃんだ。

観念して振り向いた先には、大男が立っていた。

「そ、総ちゃん……」

総ちゃんとは、幼い頃に私を助けてくれた、あの総ちゃんだ。

いつの間にかデフォルトになった銀フレームの眼鏡の奥で、少し吊り上がった切れ長の目が私を見てさらに細められる。

紅顔こうがんの美少年だったのは遠い昔。以前から武道を嗜たしなんでいた総ちゃんは、あれからさらにその道を極め、すっかり筋骨隆々とした大男になっていた。

緩いくせつ毛の黒髪を撫でつけたオールバックに、屈強で筋肉質な身体に似合うよう仕立てられたオーダーメイドのイギリス製のダークスーツ。

よく通った鼻筋とふっくらとした唇は、人目を惹く美形であることに間違いない。

間違いないのだけれど、兎にも角にも愛想がない。

普段から仏頂面ぶつちやうめんだけど、さらにこの状況に余程お怒りな様子で、全身からブリザードを吹き荒れさせている。

「亮次郎の仕業ね……!?!」

三佳ちゃんの声に反応して、大男の背後から穏やかな笑みの青年がひよつこりと顔を出した。

「ごめんね。でも三佳だって合コンのことを黙ってたんだから、おあいこだよね」

テヘッと舌を出した顔は三佳ちゃんとよく似ている。成瀬家次男の亮次郎は、三佳ちゃんの双子の兄。

二卵性とはいえ、基本的に二人は顔の造りも雰囲気もよく似ている。成瀬家のきょうだいの中で

長兄だけが、悪の元締めみたいな風格なのだ。

その仏頂面の長男は、しばらくジッと周囲を見回していると思ったら、俊敏な動きで私のグラスを取り上げた。

「男にすすめられたものを、なんの躊躇ちゆうちゆうもなく飲もうとするな」

「な……っ!?!」

——いきなり出てきて、飲み物にまで制約をつけるの!?

「私だって、もう大人なんだからお酒くらい飲めるし!」

カクテルなんかコンビニでも売っているし、飲み会だって今日が初めてでもない。

総ちゃんは私の抗議などどこ吹く風といった具合で、グラスに鼻を近づけた途端に眉間に皺しわを寄せる。

「この酒は見た目に反してアルコール度数が高い。それに、どこかの輩やからがさらに酒を追加していないとも限らない。そうになったら、慣れていない初海は一撃で潰つぶれるぞ」

「え、そうなの!?!」

「本当だ! 彼のうしろに酒瓶があるね。ウォッカベースのカクテルに、さらにウォッカを追加したのかな?」

総ちゃんの陰から身を乗り出した売ちゃんが、男の人たちの背後をまじまじと覗のぞき込む。

「気に入った女の子に強いお酒をすすめて、酔い潰れたところをお持ち帰りする……よくある昏睡こんずい

レイプの手だね」

にこやかな亮ちゃんから飛び出した物騒な言葉に、その場にいる男女共に顔色が変わった。

「……や、やだなあ！ そんなこと、するわけないじゃないですか」

アハハと乾いた笑いを漏らしながら、目の前の彼が身体をずらしてなにかを隠そうとしたのを、私が見逃すことはなかった。

だって、あからさまなんでもん。これでは、どうぞ疑ってくださいと言っているようなものだ。

「なら、この酒に入ったアルコール量はどうか説明する？」

「店側のミス、じゃないですか？」

「僕の知り合いに君たちと合コンしたって女の子がいるんだけど、そのとき妙な話を聞いたんだよねえ」

総ちゃんが厳しく追及し、亮ちゃんが追加情報を投入する。相変わらず見事な連携プレーである。こんなふうに関詰められれば、たいていの人間はボロを出す。

「そんなこと知るかよ！ それに、俺がやったなんて証拠もない……っていうか、あんたたちは誰だよ。いきなり乱入してきて、わけわかんないこと言い出してさ」

自分が疑われ始めたら真っ先に他人のミスだと言い逃れようとするのも、証拠云々を持ち出してくるのも、いかにも胡散臭い。

さつきまではなんともなかったのに、途端に彼が不審人物に思えてくる。

私でさえ気づくものだから、それがわからない総ちゃんではない。

「そうか。なら、君たちの持ち物を調べさせてもらおうか」

「な、なんでだよ!? あんたになんの権利があつてそんなこと言い出すんだよ」

——それが、あるんだなあ……

一般人には与えられていないけれど、犯罪が疑われる場合に職務質問をする権利が、総ちゃんにはある。

「名乗るのが遅れた。俺は、その二人の保護者だ。ついでに——こういう者だ」

そう言いながら、総ちゃんが胸ポケットから取り出したのは警察手帳——

「け、警察……!?!」

わかりやすく狼狽える彼に、総ちゃんはほんの少しだけ口角を上げた。

「さあ。うちの妹たちになにをしようとしたのか、きっちり話してもらおうか？」

やっと笑ったと思ったら、なんてドス黒い笑み……

幼い頃に私を救ったヒーローは、真正正銘「正義の味方」になっていた。

結局彼らは所持品の確認を拒否して、逃げるようにその場から去って行った。警察手帳まで持ち出した総ちゃんだけ、被害がなかったことからあとを追うことはなく、合コンはそこでお開きとなった。

——つていうか、全員ゲルだったんかい！

その後、私と三佳ちゃんは、居酒屋近くのファミレスへと連行された。

優雅にコーヒーを飲む総ちゃんと、ニコニコしている亮ちゃん。私たちは俯いたまま、いろんな意味での反省会の真っ最中である。

「なんで……お兄が、ここにいるのよ？ 地方での研修期間はまだ終わってないはずでしょう!?」
恨めしげに目の前の人物を睨み上げる三佳ちゃんは、さすがに兄妹だけあって勇氣がある。

私たちが実家を脱出できた要因は、総ちゃんが先に実家を離れたからだ。

なんでもできるお隣のお兄ちゃんは、本当に優秀な人だった。中学高校と地元でも有名な進学校でトップの成績を収め、末は博士か大臣かたいそう期待されていた。

しかし、いよいよ大学進学となったとき、総ちゃんが希望したのは、実家から通える地元の大学だった。

多分それって、妹と——ついでに私心配だったからだよね？

どんだけ過保護なんだって話だけど、さすがに周囲が必死に説得したらしい。三佳ちゃんによると、高校の校長先生と学年主任が菓子折持参で夜な夜な訪ねてきたそうだ。

結局総ちゃんが折れる形で、日本でもトップクラスの都心の大学に渋々進学した。

——まったく乗り気じゃないくせに、楽勝で合格するってどうなのよ？

その後、総ちゃんが選んだのが警察官という職業だった。

子供の頃から正義感が強かったから、警察官になるのは納得できた。しかし、そこでも本人は、交番勤務のお巡りさんを希望したらしい。

——トップの大学を卒業した人が、迷わずノンキャリアを選択するってどうなのよ？

お巡りさんだつて立派な仕事だけど、総ちゃんが選択するには障害が多かった。当然、ここでも周囲に説得され、紆余曲折を経て総ちゃんは警察庁へと入庁した。

本人が思い描いていた未来とは違っていたかもしれないが、順調に出世しているご様子だ。今年に入り、研修を兼ねて地方へ赴任していた。

だからこそ私たちは、二人で画策をして実家を出た。同じ職場を選んで、二人でルームシェアすることを条件に両親の承諾を得た。

総ちゃんには事後報告だったけれど、『二人で同じ職場を選んだことは褒めてやる』と一応認めてもらった。亮ちゃんが通う大学の近くに就職したことも、幸いだと思う。

だけど、いずれ総ちゃんは東京に戻ってくる。それまでに、やりたいことをして、こつちでの生活を整えてしまおうと思っていた。

なのに——

「研修期間はまだ終わってないけど、警視庁でちょうど欠員が出たから、兄さんが警視庁に出向になつて東京へ呼び戻されたんだって。すごいよね」

総ちゃんに代わって、亮ちゃんが私たちの疑問に喜々として答える。

——くっ、この、エリート様が！ 研修期間が短縮になるなんて、どんだけ優秀なのよ!? ちらりと様子を見ただけなのに、眼鏡の下の涼しげな目とバッチリ視線が合ってしまった。

「誰かさんたちと違って、日頃の行いがいいだけだ」

——人の心を、読まないでほしい。

「亮次郎は、知ってて黙ってたのね?」

三佳ちゃんが亮ちゃんをジロリと睨む。

「だから、おあいこだって言ったでしょ?」

「そもそも、なんであんたが合コンのことを知ってるのよ!？」

「バイト先に来た三佳たちの会社の先輩から、偶然、聞いてちゃって」

偶然なんて白々しい。亮ちゃんは笑顔の爽やかな好青年だが、実は兄の忠実なスパイだ。

亮ちゃんは最近、私たちの会社近くのカフェでアルバイトを始めた。オシャレでリーズナブルと女子社員たちの人気が高く、ランチタイムや仕事終わりによく利用される憩いの場だったりする。

彼のことだから、よく調べた上でのカフェを選んだに違いない。だって、入社してすぐに七緒さんに連れられて行った頃にはいなかったのに、ある日突然働いていたんだから。

きっと、カフェで合コンの話聞いて、三佳ちゃんの予定と擦り合わせたんだろう。

眼鏡のブリッジを指で押し上げた総ちゃんは、真つ直ぐに三佳ちゃんを見据えた。

「黙っていたということは、うしろめたさはあるんだな?」

カチリとコーヒーカップをソーサーに戻す音を聞き、緊張が走る。

「うう……っ、それは……」

ぐっと喉を詰まらせた三佳ちゃんは、そのまま黙り込んでしまった。

反論できるはずもない。三佳ちゃんや亮ちゃんの兄への服従心は、昨日今日仕込まれたものではない。

「総ちゃん、三佳ちゃんの気持ちもわかってあげて。私たちだってもう社会人なんだから、先輩に誘われたら無下には断れないよ」

切れ長の目がこちらに向けられても、怯んではばかりはいられない。

「正直に話しても絶対に反対したでしょう? でも、先輩の誘いを断る理由が保護者の反対なんて、それこそ社会人としてどうかってことになるじゃない」

三佳ちゃんが乗り気だったというのはこの際置いておく。そこを突っ込み出すと、話がまた長くなるからね。

とにかく、総ちゃんのほうが社会人としても先輩になるのだから、似たような経験はあるはずだ。社会に出たからには、私たちも立派な大人だ。

ドヤ顔で正論をかざしてみたものの、総ちゃんに冷たく一瞥された。

「そういうことは、自分で自分の身を守るようになった人間が言うことだ。俺たちがあの場に踏み込んでいなかったら、自分が今頃どうなっていたかわかっているのか?」

ジロリと睨まれ、形勢の不利を悟る。

——そうでした。助けられておいて、言えることではありませんでした。

「そ、そういえば……三佳ちゃんは平気だった？ 変なもの飲まされてない？」

これはいかんと、慌てて話題をすり替えた。

「私は、自分で頼んだものしか飲んでないよ」

「三佳は初海と違って警戒心が強いからな」

——ううっ、さらりと言われた厭味が刺さる。

美人で、男の人からのアプローチに慣れている三佳ちゃんは、私よりも奔放なだけ自己防衛能力が高い。

「……総ちゃんはどうして、あの人たちが怪しいってすぐわかったの？」

思いきりトーンダウンした私に、総ちゃんは小さく笑った。

「そんなの、初海に言い寄ってたからに決まってる」

残りのコーヒーを飲み干して、ゆっくりとカップをソーサーに戻す。

眼鏡のブリッジを指で押し上げ、長い足を組み替える姿は、一瞬ここがファミレスなのを忘れるほど優雅だ。

年を重ねるごとに、総ちゃんはますますその魅力を増している。

——中身は、相変わらず過保護のままだけ。

「おまえの周りには、碌な男がない」

ずいぶん失礼な物言いだが、総ちゃんが言い切るには根拠がある。

私は、昔からとにかく男運が悪い。

小学校の頃に連れ去られかけたのを皮切りに、不審者と呼ばれる類いと遭遇したことは数知れず。電車に乗れば痴漢に遭い、道を歩けば露出狂に当たる。三佳ちゃんと一緒にいても、狙われるのはいつも私。

二人でいるのに、突然現れたおじさんが私にだけ見えるようにいきなりコートを広げたときには、さすがに泣いた……

多分、目を惹くのは三佳ちゃんだけど、私のほうが「チヨロそう」に見えるせいだろう。攻略が難しそうな山に挑戦する前に、すぐ近くにある低い山で小手調べするのと同じだ。

そして私が危険な目に遭うたびに、助けてくれるのが総ちゃんだった。

三佳ちゃんや亮ちゃんから呼び出されると、総ちゃんはいち早く駆けつけ、あっという間に変質者を撃退してくれた。

ときには、悲鳴を聞きつけてどこからともなく現れたこともある。泣きながら家に帰ったときは、落ち着くまでずっとそばにいてくれた。

だから私も、結局は総ちゃんに頭が上がらない。

「とにかく初海は、もっと自分の男運の悪さを自覚しろ」

「はい……」

決定的な出来事のあとだから、反論の余地はございませんでした。

その後も延々と説教されて、帰宅する頃には私も三佳ちゃんも疲労困憊^{けんぱい}だった。

もうお風呂に浸かって早く寝たい。だけど、最後にまだ難関が残されていた。

「だから、どうして俺を部屋に入れられないんだ？」

「逆に、なんでお兄^{にい}が入る必要があるの？」

「セキュリティのチェックとか、設備に不備がないか確認しないといかんだろう」

「そんなの、入居するときにちゃんとしたから！ 設備の管理はお兄^{にい}じゃなくて管理人さんの仕事だから！」

私たち二人は総ちゃんにアパートまで送り届けられたのだけど、そこから部屋に上がる上からなの押し問答が、かれこれ三十分は続いている。

矢面に立っているのは三佳ちゃんだが、彼女が頑^{かたく}なに拒むのには理由がある。

そんなことをしたら、秘密がバレてしまうからだ。

私たちはルームシェアをしていることになっているが、実は真っ赤な嘘である。

三佳ちゃんのアイデアで、同じアパートの同じ階でも、実際には一部屋ずつ借りている。玄関も生活空間も別の、普通の一人暮らしだ。

ルームシェアと大差ないと思うなかれ。誰かと空間を分けるのと独占しているのでは、気楽さがまるで違う。たとえ無二の親友でも、四六時中一緒なのは、やはりどこか息苦しい。特に私たちは職場も同じだから、プライベートくらいお互い自由にしたい。

家がその人にとつての城だとは、よく言ったものだ。

「初海ちゃんだって、急に来られたら困るよね!」

「そ、そうだね……洗濯物とか、そのままになってるし」

「だよね!? それに、私たちの部屋は男子禁制! たとえ身内であっても認められません!」

……本当は違うけど。当初、女性専用のアパートを借りる案もあったけど、それは三佳ちゃんが断固として反対した。理由は——いつか彼氏ができたときのために他ならない。

「とにかく、今日は無理だから! もう遅いし、近所迷惑だからさっさと帰って!」

総ちゃんは納得いかない様子だったが、この勝負は三佳ちゃんが押し切って勝利した。

「ああ……疲れた……」

エントランスで、去って行く車を見送りながら肩を落とした三佳ちゃんは、疲れ切っていた。

「お疲れ様。三佳ちゃん、ナイスファイトだったよ」

「今後の対策も立てなきゃだけど、今はもうそんな元気ないや……」

「そうだね。今日はゆっくりして、また考えよう」

お互いの苦勞を勞いながら、それぞれの部屋へと戻っていった。
アパートの裏手——部屋の灯りが確認できる場所に、一台の車が停まったことも知らず。

——ピンポーン。

翌朝、まだベッドの中にいた私は、来客を告げるチャイムで目を覚ました。
普段から、住民の誰とも交流がなければ私も警戒しただろう。だけど、私の隣には三佳ちゃんが
住んでいて、日常的に行き来がある。

きつと三佳ちゃんが朝食でもねだりにきたのだろうと、ゴソゴソと布団を抜け出して、備え付け
のモニターを確認することもなくドアを開けた。

だけどそこに立っていたのは、三佳ちゃんとは似ても似つかない、けどちょっとだけ血縁を感
じさせる風貌の大男——

「おはよう、初海。誰かも確認せずにドアを開けるなんて、不用心だな」

昨夜とは違う、カットソーにチノパンというラフな私服姿の総ちゃんは、下ろしたままの前髪を
かき分けながら口元を歪める。

笑っているようで笑っていない総ちゃんを見て、思わずドアを閉めようとした。

だがそれよりも早く、サツと伸ばされた足によって阻まれる。……くそつ、ガサ入れて培った
技か!?

「そそそ総ちゃん、な、なんで……」

言いながら必死でドアを引つ張つただけけれど、力で敵うはずもない。よくわからないドス黒い
笑みを浮かべた総ちゃんは、ぐいっとドアをこじ開ける。

「昨晚、今日は無理だと断られたから日を改めたんだが、なにか問題でも？」

問題なんか、大アリに決まっている。

「わ、私まだ起きたばかりで、パジャマだし。部屋も、片付いてないから」

それに、ここには三佳ちゃんがいらない。踏み込まれたら、二人で一緒に住んでいないことがバレ
てしまう。

「初海のパジャマ姿なんて見慣れている。ああ、でも……言われてみれば久しぶりかな」
そう言っ私を見つめる総ちゃんに——ゾクツとした。

——そもそも、総ちゃんはどうかやってオートロックを突破した？

しかも、私の部屋も見事に当てている。

「心配しなくても、ここに三佳がいいることは知っている」

「へ——!？」

混乱した私の身体がよるめき、力なくその場にしゃがみ込んでしまう。

その際に、バタンとドアが閉まる音が響いた。

「ほら、簡単に部屋に入れた。おまえには警戒心が足りないんだ」

私を正面から見下ろす総ちゃんの瞳には、見たことのない黒い炎が浮かんでいる。

総ちゃんに見られて背筋が凍ることは何度もあった。それは親に叱られる子供や、飼い主に咎められるペットのような心境だったのだけれど、なにかがいつもと違う。

「み、三佳ちゃんは……?」

「昨日のうちに亮次郎の部屋に引越していった。今日から、この部屋の隣には俺が住む」
「へ——!?!」

「おまえは逃げられなくて残念だったな」

膝をついた総ちゃんが、しゃがみ込んで私と視線を合わせる。

そして妖艶な笑みを湛えながら、言った——

「言っただろう? おまえの周りには碌な男がいらない——俺を筆頭にな」

第二話 ヘンタイが現れた!

週明けというのは憂鬱になるものだけれど、今日ほど待ち遠しいと思ったことはない。

「三佳ちゃんあああん!」

「——おっふ!」

会社のロッカールームで着替え中の三佳ちゃんを見つけて、飛びついた。

これまで、毎朝一緒に通勤していた親友と、二日ぶりの再会である。

「ああ……初海ちゃん、おはよう」

上半身下着姿という状態でいきなり背後から抱きつかれた三佳ちゃんは、奇妙な声を出したあとで私の仕業であることを確認し、目を泳がせた。

「み、三佳ちゃん、なんで、なんで……!?!」

「わかってる。わかってるから、落ち着いて」

——落ち着いてなんかいられるもんですか!

だけれど、周囲の目もあるということ、ひとまず三佳ちゃんから引きはがされる。

「なんで? なんていきなり、総ちゃんが引越してきたの!?!」

「大変だったよね。でも、五体満足そうだなにより」

一定の距離を保った三佳ちゃんは、私の全身をジロジロとチェックする。

「見た目は変わらないのね」

意味不明な呟きをしながら、なんとなく生温かい目をしているのはなぜだろう?

「精神的には大ダメージだよ! 本当に大変だったんだからあ……」

「まあ、その件について朝っぱらから話すのはなんだから、お昼休みにでもゆっくりと。ね?」

どうして朝から話しちゃいけないのかわからない。今すぐにでもぶちまけたいのに、焦らすなん

てこの小悪魔め！

そりゃあ、始業前に終えられるほど短い話でもないけれど。

私の脳裏には、この二日間の悪夢のような出来事が次々と蘇る――

「本当にもう、大変だったんだから……」

待ちに待った昼休み。

社員食堂でランチをしながら、私は言いたくて仕方がなかった愚痴をひたすら三佳ちゃんにぶつけていた。

ちなみに、いつも利用しているカフェの利用は自粛した。あそこには総ちゃんの忠実なしもべがいるから、なにを報告されるかわからないからね。

過保護な総ちゃんから逃げるためにあれこれ画策してきたのだけれど、とつくの昔にバレていたらしい。三佳ちゃんは部屋を乗っ取られ、私の隣人は妹から兄にチェンジした。

「勝手に乗り込んできたくせに、引越しの手伝いまでさせたんだよ？ 買い出しにも連れていかれて、近所の案内させられて、それから三佳ちゃんの部屋の掃除でしょ……ああ、三佳ちゃんの荷造りは私がしたからね。まったく、私は総ちゃんの小間使いじゃないんだから！」

この週末は録りためたドラマを一気見してのんびりしようと思っていたのに、寛暇もなかった。さすがに夜には帰っていったけど、食事が終わってもいつまでも総ちゃんが居座っているもんだか

ら、自分の部屋なのにまったく落ち着けなかった。

この窮屈さを理解してくれるのは、私の他には三佳ちゃんしかいない。それなのに、この冷たい反応はなんだ。

箸を止めてポカンとしているだけである。

「えっと……それだけ？」

私がほしかったのはそんなリアクションじゃない。

「それだけって、三佳ちゃんなら私の気持ちをわかってくれるでしょう!？」

「うん、まあ、わかるけど。その、初海ちゃんは……食べ、られた？」

「食べる？ そりゃあ、総ちゃんの手料理はこれでもかかってほど食べさせられたけど」

総ちゃんは外食が好きではないらしく、食べたいものは作ってしまう人だ。腕前だつて大したものである。

総ちゃんの手料理は好物だから、悲しいかな、すすめられると断れないんだなあ……

「朝食は冷蔵庫にあったパンとチーズオムレツで、お昼はテイクアウトのお弁当だつたけど、夜は総ちゃんお手製のロールキャベツ。翌朝は、ごはんとお味噌汁の和定食で――」

もちろんそれらは私の部屋のキッチンにて調理された。だからこそ、後片付けや翌朝の下ごしらえが終わるまで、ずっと総ちゃんは私の部屋にいたのだ。

「そういう意味じゃなくて……そうか。実力行使に出たから、いよいよと思つただけだ」

「なんの話？」

「……なんでもない。私だって、夜中に襲撃されて大変だったんだから」

三佳ちゃんが連れ出されたのは、なんと飲み会の日の深夜だった。そろそろ寝ようとしていたところで突然インターホンが鳴り、カメラに映った訪問者が兄たちだとわかった三佳ちゃんは必死に抵抗した。

それでも引き下がらない二人に、続きは総ちゃんの車の中で話そうと部屋を出て……今日に至るのだそうだ。

どうりで、三佳ちゃんが部屋を出たのにも気がつかなかったわけだ。私のほうが、三佳ちゃんよりも先に就寝したのだろう。

「多分、帰ったふりをして外で張り込んだのよ。車に乗ったときにはもう私たちが別々に暮らし始めることはわかっているみたいだったから、部屋の灯りでもチェックしてたんじゃない？」

恐るべし、刑事の張り込み技術。それをまさか、実の妹の監視に活用するとは。

黙って一人暮らしをしていたことを咎められ、こつびどくお説教された三佳ちゃんは、罰として亮ちゃんの部屋に住むことになってしまった。

亮ちゃんにとっても迷惑な話だが、私たちが合コンに参加するとわかっていながら引き止めなかったことへのペナルティ、だそうだ。

なんたる横暴とドン引きしたいところだが、総ちゃんに忠実な亮ちゃんはすんなりと受け入れて

しまったので、三佳ちゃんも最終的に従わざるを得なかったらしい。

私だってバレたら即座に連れ戻されると思っていた。だけど、私たちにも仕事があり、アパートには契約だってある。それを考慮して今のところ猶予が与えられたみたいだけれど、今の生活を続けるための条件が小うるさい監視付き、ということだろう。

「初海ちゃんにはお兄、私には亮次郎で、監視体制は同じでしょ？ でも亮は、私にごはんなんて作ってくれないもの。そこは初海ちゃんのほうがいいわよ。お兄のロールキャベツは、初海ちゃんの好物だもんね」

「あれは……美味しかった」

日曜の夕飯もこれまた大好きな鶏の炊き込みごはんとか茶碗蒸しだった。なんだかんだ言っても、子供の頃からの積み重ねで、胃袋はがっちり掴まれてしまっている。

「あ——成瀬さん、睦永さん！」

そこへ、私たちを見つけた七緒さんがやって来た。

「七緒さん、お疲れ様です」

七緒さんは私たちを苗字で呼ぶが、私たちには自分を名前で呼ばせるのには理由がある。

彼女の苗字は「緒方」。本人的には緒方七緒という二回も「緒」が付く名前にコンプレックスがあるらしく、熱心に婚活するのも単に苗字を変えたいだけ、という噂もある。

「お疲れ様。この間はごめんね？」

七緒さんは私たちのそばに来るなり、両手を顔の前でパチンと合わせて頭を下げた。

もちろん、先日の合コンの件だ。なんでも相手とはSNSで知り合ったらしく、直接会ったのは当日が初めてだったのだそう。

「今度ちゃんと埋め合わせするから。ご希望のタイプがあれば承るわよ？」

正直、それどころではなかったから、気にしなくていいのだけど……

「私は断然、肉食系男子が好みです」

乗り気でない私とは反対に、三佳ちゃんは食い気味で手を挙げる。

——この期に及んでまだ合コンに行く気なの？

めげない精神力はさすがである。

「睦永さんは？」

「私は……合コンは、しばらく遠慮しておきます」

私には三佳ちゃんほどの根性はないから、ほとぼりが冷めないうちにそんな気にはなれない。

丁重にお断りを入れたつもりが、七緒さんはその目を丸くする。

「どうして!? この間のお兄さんによっぽど叱られた？ それとも、もう彼氏ができたとか!？」

「そんなんじゃないです！ それにあの人たちは、私じゃなくて三佳ちゃんの親族ですから」

「ああ、そういえば、三人とも顔の系統は同じだったわよね」

——くっ、どうせ私だけ、成瀬家の面々に比べて顔面偏差値が劣りますよ。

あの二人が三佳ちゃんの過保護な兄であることと、幼なじみのよしみで私もその管理下に置かれていることを説明すると、七緒さんも納得したようだった。

「じゃあ、合コンは別として、睦永さんのタイプってどんな人？」

「あ、そういえば私も、ちゃんと聞いたことなかったかも」

七緒さんからの質問に、なぜか三佳ちゃんがばあつと瞳を輝かせる。

長い付き合いでも、私たちの間で頻繁に恋バナが出るようになったのはつい最近のことだ。なしろ、お互いに実体験もなければ、この手の話題に過剰反応する人がいるから、意図的に避けていたということもある。

私だって、恋愛には人並みに興味はあった。だけど、できやしないことを話しても空しくなるだけだ。そうやって抑制されていたからこそ、特に三佳ちゃんは社会人になってからというものの歯止めが効かなくなっただけらしい。

「好きな男性のタイプか……なんだろう」

即答できるほどの確固たるものはないから、改めて聞かれるとちよつと困る。

「とりあえず、肉食系ではないかな？」

なにしろ私には天性の男運の悪さがあるから、ガツガツ来られると不信感を持たざるを得ない。私に声を掛けてくるのは、たいていが痴漢や露出狂といった不審者なんだもん……

何度かナンパをされたこともあるけど、見た目も中身もチャライというか、下心が見えすぎてい

て嫌だった。

「でも、草食系相手だといつまで経っても進展しないわよ？」

三佳ちゃんの言う通り、恋愛経験のない私は、相手が極端な草食系だと、なかなか交際にまで発展することはないだろう。できれば相手にリードしてもらいたいから、いわゆる草食系もダメなのかもしれない。

「私の場合、粘着質か否かのほうが重要なだけだね。肉食でも草食でも、ストーカー気質だったら一発アウトだから」

「ああ……」

私の意見に、心当たりのある三佳ちゃんが遠い目になる。

男性との心躍るエピソードはなくても、変質者との思い出は豊富なのだ。

だから、そんな変質者から守ってくれるような、優しくて頼りがいがある明るくて爽やかな人が理想だ。

しかし、いつ思い出しても確な体験がない。我ながらよく男性不信にならなかったものだ。自分で自分を褒めてやりたいくらい。

私が恋愛に積極的になれないのは、絶対にこれらのせいだ……

「参考までに、七緒さんのタイプはどんな人ですか？」

私の価値観は当てにならないから、ここは経験豊富そうな先輩の意見を参考にしてみてはどうだ

ろう。

「私はもちろん家庭的な人ね。結婚後も仕事は続けたいから、家事や育児にも積極的に参加してくれないと。あとは経済力も大事！」

さすがに婚活に力を入れているだけあって、現実的な意見である。

そういえば、総ちゃんはこの理想に当てはまるかも。

この週末も散々こき使われたけど、総ちゃんはそれ以上に働いてくれた。

食事の準備はもちろん、重くて動かせなかった家具の移動もやってくれたし、手が空いたときにはパパッと洗濯物を畳んでくれた——下着まで片付けられそうになったときは、焦ったけど。

とにかく、疲れているときに率先して家事をしてくれる男性となら、結婚生活も円満だろう。

「たしかに魅力的ですよ。あ、でも、デートでは外食がしたいな。家では作れないものとか食べたいから」

「初海ちゃん、話が逸れてるよ？」

ついつい食に走ってしまったことを指摘されて肩を竦める。やっぱり私はまだ、色気より食い気が勝っているのかもしれない。

「睦永さん、顔の好みとかは？好きな男性アイドルとか俳優さんとかいない？」

「そりゃあ、世間的にイケメンと呼ばれる芸能人は格好いいと思いますけど、いまいち現実味がないうち。出会うことも、なにかが起る予感もないし」

「じゃあ、今まで出会った中で一番格好よかった男性は？」

「それは……」

思い当たる人は、総ちゃんしかない。

私を守ってくれたあの日から、総ちゃんは私のヒーローだ。

過保護の度が過ぎていることを除けば、後にも先にもあの人に勝てる人には出会ってはいない。

「いっそのこと、お兄と付き合っちゃえぼ？」

ニヤリと口角を上げた三佳ちゃんは、兄とよく似た含みのある笑みを浮かべ、とんでもない物件を紹介してきた。

「多少性格に難はあるけど、身内から見てもそんなに悪くないと思うの。経済力もあって家事全般こなせて、初海ちゃんの心配の種である不審者の対応も万全だよ？」

「ちよっと、三佳ちゃん。冗談やめてよ」

三佳ちゃんのことだから、私が総ちゃんと付き合えば自分への監視が緩くなると思っっているんだろうけど、その手には乗るものか。

「お兄って、成瀬さんのお兄さんよね？ あれはいい男だったわ。でも、あんな素敵の人がフリーのはずないわよね？」

「そんなことはないです。お兄は性格に難があるって言いましたよね？ これまでにそんな話を聞いたことはありません」

血の繋がりがあるから逆に、お世話になっっている兄に対して、三佳ちゃんは容赦がない。

「あらやだ。だったら私が興味あるわ」

それから三佳ちゃんは七緒さんに向かって、総ちゃんの過保護っぷりを披露しはじめた。それは重度のシスコンとも取られかねない内容で、そんな相手を私にすすめるなんてどうかしている。

言われてみれば、これまで総ちゃんの彼女というものは見たことがない。でもそれは、単に私が見ただけなのではないだろうか。

年が離れているから学校生活はわからないけど、バレンタインやクリスマスといったイベントで、自宅の前までプレゼントを渡してきた女の子たちを見かけたことはある。それくらい、総ちゃんは昔から格好よかった。

私たちの男女交際に厳しく口出ししている手前、大っぴらにしていないだけだろう。もっとモテ人生を謳歌してもよさそうなものだが、変なところで義理堅いのが総ちゃんという人だ。

「でも初海ちゃんならお兄に免疫があるから、お似合いだと思っただけだな」

「まだ言う？」

諦めきれない様子の三佳ちゃんに、思わず苦笑してしまう。

私と総ちゃんが付き合う？ —— ないない、それはあり得ない。

あの人は兄のような存在でしかない。その考えは総ちゃんも同じで、その証拠に、昼夜問わず一緒に過ごしたこの数日も、艶っぽいことはなにもなかった。

——総ちゃんにとって、私はいつまでも庇護すべき子供なんだ。

今さらそんな目で見てほしいとは思わない。ただ、女として意識されないのは、年頃の娘としては傷つくこともある。

私を守つてと懇願したのは自分だった。わがままを聞き入れて、実の妹と同じ扱いをしてくれたことには感謝している。

だけど、私だっていつまでも守られるだけの子供ではいられない。

私もいつかは素敵な男性と恋愛がしたい。それ以上に、自立したひとりの大人の女性として生きていきたい。

親元を離れ、社会人として独り立ちしたばかり。まだ完全にひとりでやっていけるとは言えない私が、大人として認められるために越えなければならぬ最後の壁。それが総ちゃんだ。

もしかして総ちゃんが現れたのは、いわゆる卒業試験みたいなものではないだろうか。

「私と総ちゃんがどうこうなる可能性なんてないよ。それに私、見た目だけなら亮ちゃんのほうが好きだし」

だって私、筋骨隆々でいかにも男性的な見た目は苦手だから。総ちゃんも昔のままがよかったのに、なんで鍛えちゃったのかな。

「……それ、絶対に本人たちの前で言わないでね？」

そんな顔を歪めなくても、あの二人の前で自分の好みを披露するような真似はしない。

それに亮ちゃんも、私にとっては兄みたくないものだ。

「結局、睦永さんは理想はあっても現実と噛み合っていないのかもね。好きになった人がタイプってことになるのかしら」

「そうなんですよ！」

さすが七緒さんはわかっている。

「理想はあるけど、まだこれという人に会ってないだけなんです！」

きつと私にも、どこかにいるはずなんだ。ガツガツしすぎずスマートで、草食と肉食がちょうどいい塩梅でミックスされているような——

「そっか。ロールキャベツみたいなのがいいのかも。見た目は大人しくても中身は積極的で、重たすぎない人」

「初海ちゃん。それ、週末に食べたものに引きずられてない？」

必死に捻り出した結論なのに、やっぱり三佳ちゃんは呆れ気味だ。

「胃袋だけがつつり掴んでるのか……」

「なんの話？」

「なんでもなーい」

絶対になんでもない顔には見えない。貧困な発想力を笑われたって、これが私なんだもの。

私だって、いつかは「この人」だという相手に出会えるはずだ。

総ちゃんたちを納得させるのは骨が折れそうな気がするけれど、そんな苦勞も運命の相手となれば苦にならないだろう。

——いつか絶対、自分で見つけてみせるんだから。

三佳ちゃんや七緒さんとの他愛のないお喋りのお陰で、抱えていたモヤモヤが少し晴れた私は、午後からの仕事を精力的にこなした。

資料をひたすらに打ち込むルーティーンワークはいい。

余計なことを考えずに無心になっているうちに、あつという間に退社の時間になった。

でも、仕事が終わればまた、現実が待っている。

「ええ!? 三佳ちゃん、先に帰っちゃったの?」

部署の違う三佳ちゃんとはいつも更衣室で待ち合わせているのに、なぜか姿が見えない。おかしいと思つて電話を試してみたら、彼女はもう帰路についていた。

『ごめんね、今日はちよつと用事ができちゃつて』

「そんなことお昼には言つてなかったじゃない。……あ、もしかして」

『違うよ、合コンじゃないから。とにかく、今日はひとりで、気をつけて帰つてね』

最後は早口でまくし立てるように言葉を紡いだ三佳ちゃんは、さつさと電話を切つてしまった。

——あやしい。

合コンではないと言つていたけど、どう考えてもなにかありそうだ。

またよからぬことを考えているのかもしれない。

「あら、睦永さん。今日は成瀬さんと一緒じゃないの?」

通話の切れたスマホを片手に眉をひそめていると、七緒さんがやつて来た。

「残念ながら振られてしまいました」

「あなたたち、一緒のアパートに住んでいるんじゃないか? 仲が良いわよねえ」

「それが、諸般の事情で……」

そっか。考えてみれば、三佳ちゃんとは帰る方向が違うから、これからは別々に帰宅するのが当たり前になるんだ。

子供の頃からずつと一緒だったのにと、急に寂しくなったのが顔に出たのだろうか。七緒さんはしばらく考えたあと、ポンと手を打った。

「時間があるなら一緒にごはんでも行かない? この間のお詫びを兼ねて」

合コンについては謝罪も受けたし、気にしていない。むしろ迷惑を被ったのは七緒さんだということに、なんて律儀な先輩なのだろう。

「そんなの、もう気にしないでください。でも、ごはんには行きましょう」

三佳ちゃんもいないから、ひとりで食事するよりずっといい。

日々忙しい総ちゃんだつて、どうせ家にはいないはずだ。

なにより、こうやって総ちゃんのことを気にしているのが嫌だ。

門限なんてないのに、時間を気にしてビクビクしてしまうのは染み込んだ習性だろう。

「ただ、私はもう大人で、自由なんだ。先輩と外食して帰ったからといって咎められる筋合いはない。」

これを機会に、私だけの交友関係を広めるのもいい。三佳ちゃんを引き離れたのは、失敗だったのだ。

「どうしたの、今度は急にニヤニヤしちゃって」

「おっと、つい顔に出ってしまったらしい。」

「なんでもありません……いや、あるか。七緒さんと二人でデートだと思おうと嬉しくて」

「可愛いことを言ってくれるけど、私はデートなら男性としたいわ」

そんなふうには七緒さんとキャッキヤしながら会社を出た直後だった。

「遅いぞ」

「——げっ」

エントランスを一步出たところに、総ちゃんが立っていた。

陽が落ちて薄暗くなったオフィス群をバックに、黒いトレンチコートを羽織っている総ちゃんは、道行くサラリーマンとは違った雰囲気醸し出している。

——あんぱんと牛乳が似合いそうだ。

とにかく、なんとというか、様になっている。派手な格好をしているわけではないのに、そこにいてだけで周囲の目が自然と惹きつけられる。その証拠に、さつきから通り過ぎる女の人たちがチラとこっちを見ては、心なしか顔を綻ばせている。

「なんでこんなところにいるの!?」

「なんですって、迎えに来たに決まっているだろう」

さも当然みたいな顔をしているのは、送り迎えをするのに慣れてるからだ。

総ちゃんは実家を離れるまで、部活や勉強の合間を縫って、こうやって私たちのもとにやって来ていた。あの頃もどうやって都合をつけていたのかと不思議だったが、まさか社会人になってまで復活するとは思ってなかった。

「み、三佳ちゃんなら先に帰ったよ?」

あなたの妹は、急用ができたからと私を置いて先に帰っちゃいましたよー。

なんか怪しかったから、追いかけるなら早いほうがいいですよー。

「連絡を受けているから知ってる。だから待っていたのはおまえだけだ」

「ええ!?!」

三佳ちゃんが自ら連絡していたとは想定外だった。悪態をついていても、やっぱり恐れる存在という事なのか。

「ほら、帰るぞ」

いつまで待たせるのかとでも言いたげに踵を返したが、そうは問屋が卸さない。

「ちよつと待って、私にだって用事があるんだから！」

そう言つて、私は隣の七緒さんに腕を絡めた。

「私、先輩と食事に行く約束があるの。だから送り迎えはいらない」

振り返つた総ちゃん的眼鏡の奥の目が、スツと細められた気がした。

——ええい、怯んでなるものか。お迎えが来たからまた今度なんて、私は幼稚園児じゃないんだから。

「予定があつたのなら、私は今度でも」

「いいえ！ 予定なんてありません！」

空気を讀んだ七緒さんが引き下がろうとしたけれど、そこは下がらなくて大丈夫です。

むしろ、行かないで。私をひとりにならないで！

逃がすまいと絡めた腕に力を込めると、総ちゃんの視線がそこへと向けられた。それから徐々に上がり、七緒さんの視線とぶつかる。

「成瀬さんのお兄様、でしたね。先日はどうも」

何度も言うが、総ちゃんには愛想がない。女性に対して向けるには、あまりにもぶしつけな視線なのだが、七緒さんは大人の対応で挨拶をした。

「ああ、あのときの」

「改めまして、睦永さんの同僚の緒方と申します。先日のお詫びにと睦永さんと食事に行くところでしたの」

私がひとりで帰るのなら、断つても総ちゃんはついてくる。だが、しかし。職場の先輩と一緒にらば、総ちゃんだつておいそれとは同行できない。

「もしよろしければ、ご一緒しませんか？ お兄様にもお礼をさせてください」

こともあろうに、七緒さんは総ちゃんまで食事に誘つた。

——なんてことを言い出すの!?

「ちよつと、七緒さん!？」

私は七緒さんの腕を引き、くるりと総ちゃんに背を向ける。

「やめておきましょうよ。女同士のほうが絶対楽しいですつて」

顔と顔を寄せ合い、聞かれないようにヒソヒソとした声で、前言撤回するように要求した。

「いいじゃない。私も噂の過保護っぷりがどれほどか見てみたいの」

「そんな……」

どうやら七緒さんは、昼間の三佳ちゃんの話や私の反応で、ますます興味をそそられたらしい。

他人事なら楽しめるのかもしれないが、当事者としてはたまつたものじゃない。

——どうして仕事帰りの女子会に、保護者を同伴しなきゃいけないの!?

おまけに、婚活中の七緒さんは、十中八九恋バナをするだろう。それこそ、総ちゃんが一番嫌う

話題じゃないか。

総ちゃんは、恋愛そのものを否定するわけではない。だが、恋愛を題材としたドラマや映画、小説が目に留まるたび、世の中の男がいかに煩惱にまみれているかを説くのだ。

せつかくのロマンチックな場面でも、下心を暴露されては興ざめする。

——思春期の少女が抱く淡い憧れさえ、根こそぎ刈り取られたんだ！

そんな相手と食事に出かけて楽しめるはずがない。なにより、結婚に憧れている七緒さんにも悪影響を及ぼしかねない。

懸念する私に、七緒さんは余裕の態度で耳打ちする。

「大丈夫よ。それに、もしも過保護の理由が理不尽なときは、援護してあげる」

思わぬ申し出に、形勢が逆転する——私の中で、過保護殲滅計画が即座に練られた。

「……いいんですか？」

私も三佳ちゃんも散々抵抗してきたが、所詮敵 wasn't なかった。

総ちゃんにとつて、私たちの自由になりたいという願いは子供のわがままでしかなかった。

一枚も二枚も上手で、私たちがどんなに喚いても論破できない。

周りの大人も総ちゃんを信頼しきっていたため、今まで私たちの味方をしてくれる者は誰もいなかった。

だから七緒さんは、初めてできた大人の味方である。年齢は総ちゃんよりも下だけど、男性より

女性のほうが精神年齢は高いと聞く。この助っ人はぜひ獲得したい。

「任せなさい。年下を可愛がる気持ちはわかるけど、度が過ぎるのはよくないわ」

「七緒さん……！」

なんて頼もしい。救世主、いや、もはや神である。

女神様は、さらに身を屈めながら私にだけわかる角度で不敵に微笑む。

「それに、やっぱりいい男じゃない。本当にフリーなら、私にワンチャンあるかも、でしょ？」

「……結局、そこですか？」

どうやら七緒さんは、総ちゃんをロックオンしたようだ。

でも、もしも総ちゃんと七緒さんが付き合えば、私たちへの干渉が緩められるかもしれない。

すなりとした高身長でクール系美女の七緒さんは、総ちゃんと並んでも見劣りしない。

——だけど、それを想像したときにモヤツとするのはなぜだろう。

きっとそれは、総ちゃんがどういう人かわかっているからこそその不安に違いない。

勝負の行方がどうなるのか——期待と不安を抱きながら、私たちは食事の場所へと向かうことにした。

七緒さんが選んだのは、会社近くのカフェ——そう、亮ちゃんのバイト先のカフェである。七緒さんは最初、食事を全部持つと言ったけれど、最終的には総ちゃんをご馳走するということで話

がまとまった。理由はどうあれ、あの合コンの場を壊したのは自分だからとスマートに申し出たのだ。そうして、七緒さんが指定したこのお店に来ただけで、こんないつも行くお店ではなく、もっと高いものをご馳走してもらえばいいのに……

手料理を振る舞われることが多い総ちゃんとの外食だから、もつと贅沢がしたかった。

「そういうお店は男性と二人きりのときに行くものよ」

不満が顔に表れていたのだろう。七緒さんが小さく笑ってウインクする。

——なるほど。それが大人の恋愛なのね。

「いらつしゃいま……兄さん!？」

エプロン姿でバイト中の亮ちゃんが、私たちを見て目を丸くする。

「どうしたの、来るなんて聞いてないけど。心配しなくても真面目に働いてるよ?」

「そこは疑っていい。ここは、こちらの緒方さんの推薦だ」

「ああ、七緒さんいらつしゃいませ。初海ちゃんも」

笑顔の亮ちゃんが微妙に私から視線を逸らすのは、うしろめたいことがあるからか?

それよりも、亮ちゃんがバイト中ということは三佳ちゃんはフリーなのね。なんの用事だったのか、明日聞きだしてやる。

席に通された私たちはディナープレート注文した。本日のメニューはチキンの照り焼きで……美味しそうだ。

「先日はお世話になりました」

向かい合って座った総ちゃんと七緒さんは、改めて挨拶なんかをしている。

行ったことはないけれど、これってお見合いみたいな雰囲気じゃないだろうか?

だったら私は二人の共通の知り合いの仲人的ポジションとして、頃合いを見て『あとは若い二人でどうぞ』と消えるべきなのか。

ここはサラダを食べながら、空気に徹することにする。

「刑事さんでいらつしゃるんですね。失礼ですが役職は?」

「階級は警視で、刑事部の管理官をしています」

「まあ! エリートさんでいらつしゃるのね!」

警察組織には詳しくないが、管理官というのは刑事ドラマなんかでよく見るアレだろう。警察で働いているのは知っていても、役職なんてのは初めて聞いた。

——総ちゃんってば、本当にエリートなんだ。

「ただの管理職ですよ。それに、まだ赴任したばかりの新米です」

他人からの賞賛に慣れている総ちゃんは、テンションの上がった七緒さんにもどこ吹く風といった様子だ。

こんなに無愛想でよく社会人が務まるなと思っていただけ、会議室の上座に座って腕組みしているのは似合っている。

「ご謙遜を。まだお若いのに立派な職に就かれて、ずいぶんおモテになるんでしょうね？」

七緒さんは早くも本題に切り込んだ。

「生憎、妹たちの世話が忙しいもので」

どうやら総ちゃんには現在お付き合っている相手はいないらしい。それを確認した私は、咀嚼していたプロッコリーを呑み込んでホッと息を吐く。

——いやいや。別に、総ちゃんに恋人がいなくて安心したわけじゃないから！

私たちにだけ厳しくして自分は、という状況でなかったことに安心しただけだから。

それに、恋人がない理由を私を含む妹のせいにするのは、好感度が下がるポイントだ。

「家族思いですね。好感が持てますわ」

七緒さんがどう感じたかは定かではないが、漂い始めたシスコン臭を家族思いと言い換えたのはさすがである。

「でもお仕事大変でしょう。お忙しいのでは？」

「まだ挨拶回りだけです。そういえば、教えて頂いたSNSアカウントから彼らの身元を確認しました。ご協力感謝します」

合コンでの出来事は、あれで終わりではなかったらしい。

あの場からは逃げた彼らも、尻尾はきっちり掴まれていた。

総ちゃんは執念深いのだ。三佳ちゃんと逃げ出したことは一度や二度ではないが、どこまででも

追いかけられた覚えがある。

思い出しても、あれは地獄の鬼ごっこだった……

総ちゃんは、私たちの行動範囲や交友関係を徹底的に調べ上げて把握していた。

それに、幼い頃から人一倍、正義感が強い。そこに抜群の記憶力と運動神経もあるものだから、ストーカーにでもなったら手のつけられない相手だ。

つくづく、間違った方向に行かなくてよかった……

「身内にこんな頼もしいお兄様がいれば、女の子は安心ですね」

「当の本人たちには迷惑がられますがね」

チラッと投げられた視線が痛い。

——なんだ、自覚はあったんだ。

「これでも少しは自粛していたんですよ」

「……嘘だあ」

黙っているつもりが、思わず口をついて出てしまっう。

「俺が実家を出てからは緩んだだろう？」

それって、私たちが卒業するまでのルールをバッチリ敷き終えたからだよね？

緩んだのは束縛ではなく、私たちの気持ちだけだ。

総ちゃんがいなくなつて多少は羽が伸ばせるようになったけど、学生ではできることは限られて

いた。

社会に出て、ようやくこれからというときにふたたび現れて、よく言うよ。

「成瀬さんも睦永さんも可愛いから、心配になりますよね」

「そうですね」

——おい、そこはまず否定しろ。

いくら大事な妹を褒められたからって、額面通りに受け取るんじゃない。七緒さんは気を遣って私の名前も入れてくれただけなんだから、聞いているこつちが恥はずかしくなるわ。

「妹の三佳はともかく、初海は昔から目を離すと妙なトラブルにはかり巻き込まれるので、こちらの気が休まりませんよ」

「……最近、気をつけてるもん」

そりゃあ、誘拐されかけたり連れ込まれかけたりといろいろあったけど。

事情を知らない七緒さんが不思議そうにしているので、私はこれまでに起きた妙なトラブルについてごく簡単に説明した。

「た、大変ねえ……」

案の定、七緒さんはちよつと引いてしまった。

「もしかしてお兄様は、それが理由で警官に？」

「まあ、きっかけではありませんね」

総ちゃんの言う通り、それは単なる職業選択のきっかけに過ぎないはずだ。

だけど、よく事情を知らない人が、総ちゃんは可愛すぎる妹と不審者に狙われやすい私のために刑事になったのだと聞いたら？

たいていの人は、過保護な束縛に最初は同情してくれる。でも、背景にあるトラブルを知ると、『だったら過保護になっても仕方ない』という考えに変わる。

「それは……心配になっても無理はありませんよね」

察しのいい七緒さんも例外ではなかった。

——なんだか、風向きが怪しくなってきた？

このままでは不利なので、軌道修正せねばならない。

「ちよつと待ってください。話だけ聞くと悲惨ひげんかもしれないんですけど、私はそこまで馬鹿じゃありませんから」

たしかに危ない目には遭ってきたし、そのたびに怖い思いもした。

だけど私は卑屈になんかなくていい。トラブルは紙一重も含めてすべて未然に防がれてきたし、貞操だって守られている。

それに、学習能力だってある。私とて自分の身を守るためになんの対策も講じていないわけではないのだ。

夜道を歩くときにはなるべく明るい道を選び、背後に人の気配があれば警戒している。電車に乗

際には女性専用車両を選んで、バッグには常に防犯ブザーを携帯している。

いくら総ちゃんが刑事でも、四六時中私たちだけを守るわけではない。警察は市民の味方で、私もその内のひとりではない。

「ちゃんと自分でも気をつけているから、昔に比べて変な人に出会う回数も減ったんです。それにもう簡単に連れ去られるような年齢でもないから、いつまでも監視は必要ないんです」

「だったら先日の合コンは？」

「——うっ」

ジロリと冷たい目で睨まれ、必死のアピールは空しく止められる。

「俺と亮次郎が乗り込まなかったらどうなっていたと思う？ それに、今まで無事でいられたのは誰のおかげだ？」

——そこを突っ込まれると、非常に痛い。

「総ちゃんです……」

トラブルの多くに対応してくれたのは総ちゃんだという自覚はある。

でもそれは、私たちが未成年だったからだ。これから先は自分の身は自分で守らなくては、いつまで経っても自立なんかできるわけではない。

——合コンの件は失敗だったけど、失敗から学ぶことだって多いのに。

経験がないから失敗するだけで、一度覚えれば次からは気をつけられる。機会さえ与えてもらえ

れば、私だって。

そう思っているのに、いつも総ちゃんを説得することができない。総ちゃんを言い負かすには、握られている弱みの数が多すぎるんだ。

「でも、大切にするばかりでは成長しないんじゃないかしら？」

口籠もった私を見かねてか、七緒さんが救いの手を差し伸べてくれた。

「七緒さん……！！」

「植物も、病気や害虫を駆除しすぎると成長を阻害してしまうでしょう？」

なんていいことを言うんだろう。さすがは亀の甲より年の功……と思ったなんて絶対に口には出せない。

手を掛けすぎるのが愛情ではない。

甘やかされるのは、いい加減うんざりなんだ。可愛い子には旅をさせよ、獅子の子落とした。

これで目を覚ましてくれるならいいんだけど……そうは問屋が卸さないのが総ちゃんという人である。

「適度な刺激はこちらが意図しなくても勝手に与えられていますけどね」

——そうなんだよ。こんな一般論で懐柔されるほど、甘くはないんだよ。

本当に頑固で融通が利かない。なにが総ちゃんをここまで執着させるのか、私にはまったく理解ができない。

「それに、すべてを排除しているつもりはありませんよ。こうして本人たちも社会生活ができてい
るでしょう？ もしも本気ならば、家に閉じ込めて監禁しているはずですよ」

——おおう。なにその、刑事らしからぬ不穏なワードは。

しかも、当の本人は滅多に見せない笑みなんて浮かべちゃってる。その背後にドス黒いオーラが
見えるのは、私だけではないはずだ。

——きつと総ちゃんは、筋金入りの管理癖の持ち主なんだ！

三佳ちゃんが姿を見る前に逃げだそうとするのも、結局は大人しく言うことを聞くのも頷ける。

長年の付き合いがある私でさえドン引きなのだから、七緒さんはなおさらだろう。

「本当に、可愛がっていらつしやるのね……」

ほら、若干声の上擦っている……

「それはもちろん」

臆せず応えた総ちゃんは、ますます笑みを深くする。それが怖い、もはやホラーだ。

なのに次の瞬間、雰囲気が一変する。

「一生守ると決めていますから」

はつきりと告げた総ちゃんは、さっきまでの狂気じみた笑みというより、慈愛に満ちた穏やかな
顔をしていた。

その表情は、家族愛ではない。

妹に対する気持ちなのに、それはもう——恋愛に等しい感情なのではないだろうか。

「成人したから少しは認めてやらなければと思うのですが、やはりそばにいますと目についてしまっ
たのですね」

総ちゃんも、自分の想いに戸惑うところがあるような返答だ。

だって、実の妹なんだよ？ 本当は血が繋がってませんでしたなんてオチ、ないんだよ？

頭のいい人だから、手放したほうがいいことくらいわかっているはずだ。それでも、どんなに頭
で考えても感情が追いつかないのが恋愛だ——と、本で読んだ。

「だからこそお願いしたい。私の目の届かない場所では、代わりにしてもらえませんか？」

総ちゃんは居住まいを正すと、真っ直ぐに七緒さんを見た。

「初海も三佳も、あなたのことを慕っているようです。同じ職場に信頼の置ける先輩がいるのは
私も心強い。あなたが未熟な二人を見守ってくださいるなら、私も必要以上の干渉はしないと約束し
ます」

——なんかもう、どんだけ〜？ だ。

どんだけ妹が大切なんだ。こんな申し出をほぼ初対面の七緒さんにするなんて、総ちゃんの愛情
は重すぎる。

「わかりました……」

だけど、七緒さんはすんなりと受け入れた。

——この手のタイプは断ると後々面倒だから。

七緒さんは女の勘で感じ取ったと、あとからこっそり教えてくれた。

七緒さんと別れて家へと向かう帰り道、私の足取りはいつもより重かった。

対して、隣を歩いている総ちゃんはご満悦だ。

「……ご機嫌だね？」

鼻歌を唄うほどあからさまに浮かれているわけではなく、顔はいつもの仏頂面のままでも、感情の機微くらいはわかる。それくらい長い時間を共に過ごしてきた。

「当然だ。これでおまえたちが誘われることはなくなるだろうからな」

総ちゃんからお守り役を託された形になった七緒さんは、今後私たちを合コンに誘うことは少なくなるだろう。

帰り際に『想像以上だったわ。彼は敵に回したくないわね』となんとも言い難い顔をしていたのを、なんだかとても申し訳なく思う。

「そんなに、合コンに行くのが嫌なの？」

「嫌に決まっている。さっきの話を聞いてなかったのか？」

「聞いてたけど……でも、やっぱり、妹にそこまで執着するのは……」

「——は？」

誰も言わないし、言っても聞かないのはわかっているけど、それなら私が苦言を呈するしかないだろう。

「そりゃあ、三佳ちゃんは可愛いよ。三佳ちゃん以上の女の子なんて、私も会ったことがないもの。だけど実の妹にそこまで入れ込むのは、倫理的にもよくないと——」

「ちよつと待て。なんで倫理云々なんて話が出てくるんだ」

食い気味に遮った総ちゃんは、足を止めて立ち尽くしている。

「……だって総ちゃんは三佳ちゃんを……」

「おまえは俺をなんだと思ってる？」

「筋金入りのシスコン」

「馬鹿か」

失礼な言葉を吐き捨てた総ちゃんは、そのまま頭を抱えてしまった。

——この態度は、落ち込んでいる？

「前から知っていたが、おまえは相当鈍いな」

なんだかすぐく呆れられている気がして、ムカつくんですけど。

ムツとして口を尖らせていると、総ちゃんは深い深いため息を吐いた。

「初海——今週末、出かけるぞ」

「へ？ まあ、いいけど」

なんの脈絡もなく予定を入れられ断りたいところだが、生憎あいにくスケジュールは空いている。それに、こんなふうに急に予定を入れられるのは珍しくない。昨日までは問答無用で連れ回されていたのだから、あらかじめ教えてくれるだけでもありがたいことだ。

「やっぱりわかってないな」

「なにがよ」

いくら私が総ちゃんに慣れているからといって、足りない言葉の全部を察することができるわけではない。そんなのは血の繋がった親兄弟であつても難しいだろう。

——それなのに呆れるなんて、私にどれだけ期待してるのよ。

「あのね。私のことを鈍いつてわかってるなら、ちゃんと説明してくれないと伝わらないんですけど?」

「デートをしよう」

「はいはい、デートね。ほら、最初からそう言ってくれば私だつて——は?」

——今、なんつった?

「男が誘うというのはそういうことだ。鈍いおまえにも伝わるように、きっちり教えてやる」ポカンとする私に向けて、総ちゃんはわかりやすくきつちりと言い放った。

第三話 魚はk i s sで溺れない

総ちゃんに、デートに誘われた。

嬉しいとか恥ずかしいとかの前に、『なんで?』という疑問しかない。

総ちゃんとお出かけは、たいして珍しくない。

三佳ちゃんと三人ではあつたが、買い物や映画といったお決まりのデートコースならばすでに何度も回っている。

それでも、わざわざ前置きするくらいなのだから、いつもとは違うのだろうか。

約束の時間の十分前。自室を出てドアの前で待っていると、隣の部屋から総ちゃんが出てきた。

廊下に出た総ちゃんは、すでに私がいることに少し驚いた様子だ。

「——おはよう。早いな」

白シャツに紺色のパンツ、黒いジャケットを羽織っただけというシンプルな格好ながら、高身長とスタイルのよさが際立っている。

前髪を下ろしているのはオフモードの証だ。

「おはよう。だって、総ちゃんはいつも時間前行動が基本じゃない」